

## アキナスにおける“ PER SE POTESTATIVUM” と エメサのネメシオスの “TO AUTEXOUSION”

Vincent-M. Pouliot, o.p.

Per se potestativum という珍しい用語を、トマス・アキナスは *Summa Theologiae*, I a IIae の Prologus において唯一度だけ用いているのであるが、この用語によって彼は一体何を言おうとしたのあろうかまた、この用語はアキナスが新たに造り出した用語であろうか、それとも彼はこの用語を何処から借用してきたのであろうか。中世思想研究の一つの課題として私はかかる問題を追求したのであるが、その結果をここにとりまとめてみたいと思う。

実を言うと私は偶然にこの興味ある問題に遭遇したのであり、この用語の歴史的な由来は未だ何人によっても確認されていないので、只、私見を開陳するに過ぎないが、諸賢の御批判と御教示を賜われれば幸いである。

この問題を次のようにして、

- 1) 先ずアキナスの原文と、彼によって引用されているギリシャ文のラテン訳を対比し、
- 2) 次にアキナスによって引用されているギリシャ文は、誰の文章であり、どこから入って来たかを調べ、
- 3) 最後に、この引用された用語がアキナスの思想に特別の影響を与えているかどうかを解するという順序で、究明することにしよう。

(一)

**アキナスの原文と彼によって引用された Johnnes  
Damascenus のギリシャ文のラテン訳**

アキナスの原文と、彼によって引用されたダマスケヌスのラテン訳を吟味する前に、先ず次のことを注意しなければならない。即ちアキナスはヨハンネス・ダマスケヌスの *De Fide Orthodoxa* を、中世の他の神学者達と同様に、ギリシャ語ではなくラテン訳で読んだのであるが、その時代に一般に使用されていたラテン訳は、ピサの Burgundio のラテン訳であったのである。それ故、アキナスが使用しているこの *per se potestativum* <sup>(1)</sup> という用語の由来を正確に跡づける為には、当然、彼の読んだラテン訳を吟味しなければならないのである。ところで不思議にも10世紀時代においては、*standard text* であったブルグンヂオのラテン訳は印刷時代に入ってから一度も印刷されなかった。勿論、幾つかの写本は残存しているが、一般にそれを使用することはできなかった。それ故、中世哲学史家達は、アキナスによって引用されているダマスケヌスの言葉を原文と対比して見ようとすると、Migne の *Patrologia Graeca* にのせられているギリシャ文と、そのラテン訳を見るより他に方法がなかったのである。ところがこのミーニュにのせられているラテン訳は、1712年に発刊された Lequien <sup>(2)</sup> のラテン訳で、アキナスが使用しているブルグンヂオの訳とは非常に異っている。それ故そこにはアキナスの使用しているこの *per se potestativum* という用語は当然見出されないのである。両者を特色づけると、Lequien のラテン訳はルネッサンスの風潮に従って古典ラテン文を綴ることに専心した結果、原文の意味が柔かく表現されているが、これに対してブルグンヂオのラテン訳においては、中世時代の習慣に従って原文の意味を正確に伝えることに努力し、ギリシャ語をとりまぜた逐語訳がなされている。それ故ブルグンヂオの訳は非常に読みづらい訳であるが、しかし、原文と対照してみる時、原文の意味が非常にはっきりしてくるのである。

幸にも1955年ニューヨークの Franciscan Institute から、Buytaert 師の手によって、中世時代に一般に用いられたこのブルグンヂオの訳文が発

刊された。これによって我々は、アキナスがどのようなラテン語を通してダマスケヌスの思想を研究し、そこからどのような用訳を選んで自分自身の言葉としたか、更に per se potestativum の用語となった言葉に、どのようなギリシャ語があったのかを確かめてみるができるようになった。

丁度私がアキナスの per se potestativum に関して色々と問題を抱いていた時に、このブルグンヂオの手になるダマスケヌスの De Fide Orthodoxa のラテン訳が、刊行された。<sup>(3)</sup>早速この版を利用して、アキナスの Summa Theologiae の Ia IIae の Prologus を吟味した次第である。次にその結果をこの場所を借りて報告させていただくことにする。アキナスの Summa の Ia IIae の Prologus を見ると次のように記されている。即ち

Quia, sicut Damascenus dicit, homo factus ad imaginem Dei dicitur, secundum quod per imaginem significatur intellectuale et arbitrio liberum et per se potestativum; postquam praedictum est de exemplari, scilicet de Deo, et de his quae processerunt ex divina potestate secundum ejus voluntatem; restat ut consideremus de ejus imagine, id est de homine, secundum quod et ipse est suorum operum principium, quasi liberum arbitrium habens et suorum operum potestatem.<sup>(4)</sup>

ここで Prologus から引用されているのは——明らかに補われてはいるが——inteltuale et arbitrio liberum et per se potestativum に他ならない。これがこの小論の中心問題となる言葉である。

然しながらこの問題に立入る前に、先ずダマスケヌスの原文の Burgundio 訳と Lequien 訳とを対比して提示しよう。

アキナスによって引用されているダマスケヌスの De Eide Orthodoxa の中の De Homine の原文と、Burgundio 及び Lequien のラテン訳を対比してみると、次の如くである。

## BURGUNDIO (1153-54)

(Buytaert-1955-p.113 § 2 )

## Capitulum 26 -De Homine

Quia vero haec ita se habebant, ex invisibili et invisibili natura condit hominem, propriis manibus, secundum suam imaginem et similitudinem: ex terra quidem corpus plasmans, animam autem rationalem et intelligibilem per familiarem insufflationem, dans ei quod utique divinam imaginem dicimus. Nam quod quidem "secundum imaginem," intellectuale significat et arbitrio liberum \*et\* (add. BG) \*per se potestativum\* (ABDEFGMNP) quod autem "secundum similitudinem" virtutis secundum quod homini possibile est similitudinem<sup>(5)</sup>.

## LEQUIEN (1712)

(Migne P.G., t.94. col. 919-920)

## Lib. II, cap. XII-De Homine

Haec ergo cum ita se habent, hominem ex visibili et invisibili natura suis Deum manibus ad imaginem et similitudinem suam condit: sic nempe, ut efficto de terra corpore, animam ratione et intelligentia praeditam insufflatione sua ei tribuerit: id quod divinam imaginem appellamus. Quod enim dicitur, "ad imaginem," hoc vis intelligendi, arbitriique libertas significatur:

quod autem "ad similitudinem," virtutis, quantum fieri potest, expressa similitudo notatur.

さて、アキナスによって引用されている言葉を Burgundio の訳と Lequien の訳とに比較してみると、どのように似ており、またどのように異っているかが明らかである。

A	B	C
Aquinas のラテン語で引用されている Damascenus の言葉 <sup>(6)</sup>	Burgundio のラテン訳と Damascenus の原文 <sup>(7)</sup>	Lequien のラテン訳 <sup>(8)</sup>
..... significatur		..... hoc
intellectuale -----	τὸ νοερὸν intellectuale ----- δηλοῖ	vis intelligendi, ----
----- et	significat- -----et	-----
arbitrio liberum et	*ἐλεύθερον*	arbitriique libertas
per se potestativum.	arbitrio liberum *et* ἀύτεξούσιον *per se potestativum*.	----- significatur.

この考えからA欄とB欄がいかに似ているか、またB欄のところでラテン訳の下に附加えられているダマスケヌスのギリシャ文が、意味においていかにA欄とB欄に近いかは明らかである。これに対してC欄の Lequien の訳はB欄の Burgundio の訳よりも、classic ではあるが、意味において、ダマスケヌスの原文からはるかにへだたっている。

そこでC欄の Lequien のラテン訳を、除外し、B欄の Burgundio のラテン訳と、ダマスケヌスのギリシャ原文とを比較し、これをA欄のアキナスによって引用されている文章と対比してみよう。

先ず、B欄のブルグンヂオのラテン訳の中の星印のついている言葉について述べると、第一に、\*et\* の接続詞は BG の写本に現われている。(Buytaert - 版においては P.113, 25 行の註参照)。次に \*per se potestativum\* は、殆ど全ての写本 ABDEFGMNPR に現われている。従ってブルグンヂオのテキストの中に当然入れられなければならぬ。

更にB欄中のギリシャ文において、下から二行目に ἐλεύθερον のいう語がある筈であるが、ダマスケヌスのテキストはミーニュの P.G. しかなく、校定本(原本批評研究版)が未だ刊行されていないので、確めることができない。

然しながら、このように推測することには充分な根拠がある。なぜならミーニュの P.G. においては欠けている用語 ἐλεύθερον は、A欄、B欄、C欄においてラテン訳されているのみならず、後に明らかにされるようにギリシャ系の教父達の書物には、文字通り挿入されていることがあるから。

以上によってアキナスは、ブルグンヂオのラテン訳を通して、ダマスケヌスの De Fide Orthodoxa, De Homine より正確に引用したことが明らかである。また、この Summa Theologiae I a IIae Prologus に現れている per se potestativum はブルグンヂオの訳語であり、ダマスケヌスの τὸ αὐτεξούσιον をラテン訳したものに他ならないことも明らかである。

## (二)

アキナスによって引用されているダ  
マスケヌスのギリシャ文は、いかに  
して、また何処から伝えられたか。

この問題を究明する為めには、8世紀のダマスケヌス時代より、3世紀(2世紀末)のアレキサンドリアのクレメンスの時代まで遡ってみなねばならぬが、尚、ここにストア主義の影響を考慮に入れるならば、紀元前1世紀のポセイドニオスの時代まで研究しなければならぬように思われる。私はかかる研究を手がけてきたのであるが、未だ材料も十分に整わないので研究し尽したわけではない。従って、只、現在までに到達し得た結論だけを述べさせていただくこととする。ヨハンネス・ダマスケヌスは *τὸ αὐτεξούσιον* という言葉の意味を、主に De Fide Orthodoxa の第二巻において説明している。特に第12章から始まる De Homine の全体にわたって、殊に22章から28章において詳論している。また同じ De Fide Orthodoxa の第三巻においては、キリストの自由意志について語る第14章において *αὐτεξούσιος* の意味を詳しく説明している。

ここで注意すべきことは、ブルグンチオがキリストの場合に *αὐτεξούσιος* に完全にあてはまるラテン語はあり得ないと考えてか、ラテン語のなかに *autexusios* をそのままラテン文字で書き、それにあたるラテン語を括弧のなかに入れてしまっていることである。かかるブルグンチオの几帳面な訳し方によって、*αὐτεξουσίτης* 乃至は *αὐτεξούσιος* を、正確に訳すのは、いかに困難であるかがわかるのである。実際、*liberum arbitrium* でも、*liberi arbitrii potestas* をもってしても *τὸ αὐτεξούσιον* の深い意味は完全に云い現わすことはできない。語源的にも、また、哲学的神学的な意味でも *per se potestativum* というラテン訳が一番近く、且つ正確であるように思われる。*τὸ αὐτεξούσιον* を始めてラテン語に訳したのはテルトリウス<sup>(9)</sup> であると云われている。ところでテルトリウスは De Anima の21章におい

て、この *αὐτεξούσιον* は *liberam arbitrii potestatem* であると云い、*liberi arbitrii potestatem* であるとは云わないのである。

ヨハネス・ダマスケヌスは、8世紀の中頃(749年)に没したギリシヤ教父最後の偉大な神学者であって、彼の全集のなかにはギリシヤ系のキリスト教の伝統が綜合されている。特にそこにはカパドキアの教父達、即ちバシリオス、ナヂアンズスのグレゴリオス、及びニッサのグレゴリオス、またアレキサンドリアのクレメンスとオリゲネス等に特有な神秘主義の影響が顕著に現われている。

勿論7世紀の *Maximus Confessor* の影響もヨハネス・ダマスケヌスの著作のうちに見受けられる。意志の働きとその自由性、判断、選択、決定等の自由に関する論説において、<sup>(10)</sup> 両者の間に同様の見解が多く見出されるのである。然しながら不思議なことにそこでは *Maximus Confessor* は *αὐτεξούσιον* という用語を使用しない。寧ろこの用語を避けているようである。しかして只、*εξουσία* という用語を用いているのみである。その理由は未だ明らかではない。しかしそれにも拘らず、彼はカパドキアの教父達やアレキサンドリアの神学者達を引用する時には<sup>(11)</sup> *αὐτεξούσιος*, *αὐτοκρατής*, *αὐθαίρετος*, *αὐτεξουσίτης* 等の如き、ニッサのグレゴリオス、アレキサンドリアのクレメンス、アタナシオス、或はまた、リオンのエイレナイオスにおいてさえ見出される用語を躊躇なく使用している。

これに対して、4世紀のニッサのグレゴリオスの用いた用語は、ヨハネス・ダマスケヌスの全著作のなかによく取入れられている。それがアキナスの体系、特に、その倫理学に伝えられていると思われる。とにかく、ヨハネス・ダマスケヌスは、ニッサのグレゴリオスの真正の書物のみならず、<sup>(12)</sup> 非常に有名になった偽著 *De Natura Hominis*——<sup>(13)</sup> 少なくとも *De Anima*<sup>(14)</sup> という表題でグレゴリオスの全集のうちに含まれている *De Natura Hominis* の第二章と第三章——をも、グレゴリオスの真正の書物として受入れている。

ヨハネス・ダマスケヌスの権威によって、ニッサ乃至はエメサのグレゴリオスの著作と言われた *De Anima* は、中世時代の神学者達に非常に尊崇され、よく用いられた。然しながら、この書物は、ニッサのグレゴリオスの著書ではなく、5世紀の始め頃のエメサのネメシオスの著書であることが、現在全ての学者によって認められている。<sup>(15)</sup> 然しながら、たとえ、この書物が変わっても、その中に伝えられている教説と用語には変りがない。そこでこの書物を詳しく吟味して、そこからどのような教説と、どのような用語がヨハネス・ダマスケヌスに受入れられ、トマス・アキナスに伝えられたかを究明しなければならぬ。然しながら今は、只、一つのことだけ、即ちアキナスの *per se potestativum* はダマスケヌスの *De Fide Orthodoxa* を通して、ニッサのグレゴリオスの書と考えられ、エメサのネメシオスの *De Natura Hominis* から伝えられた、ということ述べたい。

この小論の主題となっている *intellectuale et arbitrio liberum et per se potestativum* と言うアキナスの *Summa, Ia IIae* の Prologus に用いられている言葉が、エメサのネメシオスの *De Natura Hominis* に書かれている言葉と全く同じ言葉であることを明示せんがために、このアキナスが引用している言葉の横に、ネメシオスのギリシャ文と、その三つの有名なラテン訳を提示して比較してみることにしよう。三つの有名なラテン訳とは次の三人の学者の手になるラテン訳である。

- 即ち、 A—11世紀の *Alfanus*<sup>(16)</sup>  
 B—17世紀の *Morelle*<sup>(17)</sup>  
 C—19世紀の *Matthaei*<sup>(18)</sup>

この三つのラテン訳と共に、ピサのブルグンヂオのラテン訳も提示して、比較してみたいのであるが、ブルグンヂオの手になるネメシオスの遂語訳は手に入らなかったもので、残念ながら比較して見ることができなかった。実際アキナスもベトロス・ロンバルドスも、ブルグンヂオのラテン訳

を通してネメシオスの著作に接し、その思想と用語を利用したのである。これに対してアルベルトス・マグヌスは *Alfanus* のラテン訳を使った。

さてネメシオスの原文と、その三つのラテン訳の次に、ヨハンネス・ダマスケヌスの原文、及びブルグンチオによってアキナスに伝えられている逐語訳をのせて図示すると、次の如くである。

A	B	C	D	E	F
NEMESIOS	ALFANUS	MORELLE	MATTHAEI	DAMASCENUS	AQUINAS
		Nam			per imaginem significatur
		RATIO-NE		τὸ νοερόν	INTELLECTUALE
		praeditum		δηλοῖ	et arbitrio
ἐλεύτερον	LIBERUM	LIBERUM	LIBERUM	*ἐλεύθερον*	LIBERUM
γάρ τε	quid	quiddam	est enim		
καὶ αὐτ-εξούσιον	ET SUAE POTESTATIS	ET SUI JURIS	SUIQUE JURIS	καὶ αὐτ-εξούσιον	ET PER SE POTESTATIVUM.
		atque arbitrii			
τόλογικόν	EST RATIONALE.	EST.	QUOD RATIONEM. habet.		
(20)	(21)	(22)	(23)	(24)	(25)

この図のE欄のところ、即ちダマスケヌスのところに星印がつけられて、\*ἐλεύθερον\* という言葉が出ているが、この言葉はミーニュの不完全なテキストには出ていない。然しながら他のギリシャ文やそのラテン訳からしても、またこの命題の意味からも、更に文法的に言っても補われるべき言葉であると思われる。

更にこの図を見ると、A欄、B欄、D欄においては主語が終りの方に来ているが、C欄、E欄、F欄では最初に置かれている。然しながら主語の場所によって、文章全体の意味は変らない。そこで並置されている六つの文章の意味が、どんなによく似かよっているかがこの図によって明らかであろう。特にF欄のヨハネス・ダマスケヌスから、アキナスが引用している文章は、A欄のネメシオスの原文と殆ど同じであるように思われる。

ここでは只、一つの言葉だけ、即ち *λογικόν* という言葉だけ変化している。ヨハネス・ダマスケヌスが新プラトン学派の影響を受けた為であるかどうかはここで論じないが、とにかくダマスケヌスは、ネメシオスが *λογικόν* という言葉を用いているのに、*νοερόν*<sup>(26)</sup> という言葉を使用した。そこでアキナスはブルゲンチオの逐語訳を通して *rationale* という言葉の代りに、*intellectuale* という言葉を自分のテキストの中に入れてしまったのである。

以上によってアキナスが *Summa* の *Ia IIae, Prologus* で引用しているヨハネス・ダマスケヌスの言葉は、5世紀のネメシオスの *De Natura Hominis* 第2章にある言葉と、殆んど同じであることが、明らかであるように思われる。

最後にもう一步進んで、ネメシオスからストア学派まで遡ると、アキナスが言及しているネメシオスの言葉は、ストア学派のポセイドニオスの言葉ではないかという問題が起って来る。

今世紀に入ってからネメシオスとポセイドニオスの関係に関する非常に注目すべき資料が発見され、発表された。かかる資料を吟味していかなる程度までネメシオスがポセイドニオスの影響を受けたか、また、ネメシオスが *De Natura Hominis* において述べている言葉はポセイドニオスの言葉ではないか、という問題を究明しなければならぬ。

エメサのネメシオスが、如何にして、またいかなる程度までポセイドニ

オスの影響を受けたかという点に関しては、色々な研究があり、また、色々な見解が生れた。それらのなかで最も注目すべきものは、Werner Jaeger<sup>(28)</sup>の *Nemesios von Emesa* である。これは、丁度第一次大戦の始まる前、1914年にベルリンで発刊されたのであるが、この書でイエーガーは新プラトン学派の起源とその資料を探求し、ポセイドニオスが新プラトン学派の先駆者であることを初めて明らかにした。

イエーガーが到達した結論にたつて、単に新プラトン学派の歴史を専門にしている学者達ばかりでなく、キリスト教の教父時代の専門家達も非常に動かされ、ネメシオスとポセイドニオスの関係を明らかにする資料を熱心に蒐集し、その研究成果を次々と発表した。そのなかで Reinhardt<sup>(29)</sup>の *Poseidonios*, Heinemann<sup>(30)</sup>の *Poseidonios' metaphysische Schriften*, Max Pohlenz<sup>(31)</sup>の *Tierische und menschliche Intelligenz bei Poseidonios* 等が一般に知られているが、ここでそれらの一つ一つについて評論する必要はないであろう。

只、簡単に述べると、これらの研究によって次のようなことが明らかにされた。即ちストア学派の Panetios の弟子であったポセイドニオスは、チマイオスの“自己”の解釈によって、プラトンの影響を受け、次第に宗教的神秘的になり、特殊な体系を作り上げて新しい運動を起した。ポセイドニオスは哲学者であると共に、地理学者でもあった。それ故、地中海の全ての国を探ね歩き、多くの人々にあって教を受けた。特に自分自身がエーゲ海の中のロドス島に住んでいた関係から、その附近の有名な人々に会うことができた。キケロとも親しい交りを結んだ。このようなことによってポセイドニオスの見識がどんなに広く豊かになったかが想像されるのである。

然しながら、これらの研究によって教えられることのなかで最も大切なことは、殆んど消失したポセイドニオスの書物の中に含まれている思想を他の書物から拾い出して再構成していく方法である。即ち、これらの研究

はポセイドニオスの教えを受けたキケロの書物から、どのようにしてポセイドニオスの思想を見出すべきであるかを、また、セネカやカイロニアのプルタルコスや、アレキサンドリアのクレメンスや、オリゲネスや、ニッサのグレゴリオス、特にエメサのネメシオスの書物のなかから、いかにして、またどの程度までポセイドニオスの思想を汲取るべきかを教えてくれるのである。

例えば、ラインハルトとハイネマンの研究に従って、キケロとセネカを批判的に分析すれば、ポセイドニオスから伝えられている教えを見出すことができる。同様にしてポーレンツとイエーガーに従えば、キケロとセネカの書物からばかりではなく、キリスト教の教父達の書物からも、或る程度までポセイドニオスの思想を再構成することができるのである。

従って、この小論の中心問題となっている、エメサのネメシオスの *De Natura Hominis* のなかに、アレキサンドリアの新プラトン学派の思想と共に、ポセイドニオスの思想が或る程度まで含まれていることは明らかである。然しこれらポセイドニオスの思想と新プラトン学派の思想がどの程度まで、またどのような意味でネメシオスによって活用されているか、という問題が残されている。

ここでは然しながらこのような問題には触れないで、只、アキナスによって、*Summa* の *Ia IIae* の *Prologus* に引用されているネメシオスの言葉が、ポセイドニオスの言葉であるかどうかを確かめてみたい。

筆者は1955年にハイデルベルグで刊行された Max Pohlenz<sup>(32)</sup> の *Griechische Freiheit* という優れた研究書を読み、そこで *ἐλεύθερον γὰρ τι καὶ ἀπεξόριστον τὸ λογικόν* という言葉はポセイドニオスの言葉であると言われているのを見て、これがアキナスの *Summa* の *Ia IIae* の *Prologus* の言葉 *intellectuale et arbitrio liberum et per se potestativum* と全く一致していることが解って、非常な感銘を受けた。それから筆者の研究が始まり、アキナスの言葉が実際にポセイドニオスの言葉であるかどうかを、中

世より古代まで 1200 年を遡って吟味してきたのである。

ポーレンツは、*Griechische Freiheit* のなかで、先に挙げた言葉をポセイドニオスの言葉として引用しているのであるが、そこではその出所をあげていない。これはポーレンツの書き落しであると思って、丁度、ニッサのグレゴリオスの *De Anima*<sup>(33)</sup> を読んでいた時、偶然に全く同じ言葉に遭遇した。やはり上述した如く、この *De Anima* はグレゴリオスの著作ではなく、ネメシオスの *De Natura Hominis* の第二章であることがわかったので、ニッサのグレゴリオスという偽名で書かれている言葉は、ネメシオスの言葉であることが認められたのである。

そこでポーレンツによって引用されている言葉がネメシオスの言葉であるとすると、どうしてポーレンツがこの言葉をポセイドニオスの言葉であるというのかを疑問に思っていたが、丁度その時、1941 年の第一文にのっている、ポーレンツの、*Tierische und menschliche Intelligenz bei Poseidonios* を見ることができて、ポーレンツの推測の理由を知ることができたのである。

ここでポーレンツはセネカの第 121 書簡の 10 項を通して、ポセイドニオスの *λόγος* の学説を確かめ、これらがネメシオスの *De Natura Hominis* にも書きしるされていることから、ネメシオスはこの考をポセイドニオスから受けたと推論している。しかしてここでは、ポーレンツはこの *ἐλεύθερον γὰρ τι καὶ αὐτεξούσιον τὸ λογικόν* という言葉がネメシオスの言葉であることを明らかにした上、その出所をも正確に挙げている。

然しながら、ポーレンツによってネメシオスが *λόγος* の学説をポセイドニオスの体系から借用し来たことを認めるとしても、ネメシオスによって使用されている言葉が全てポセイドニオスの言葉であるとは認め難い。勿論、新プラトン学派的であるという点でのポセイドニオスとネメシオスの関係は事実として認めなければならぬが、かかかかる関係を誇張することは、無意識のうちに原本批評研究の規則にはずれる危険をまねくと思われ

る。

とにかく、ネメシオスがポセイドニオスから、ストア学派と新プラトン学派の学説を学びとったことは明らかである。然しながら、原本批評研究によって、τὸ αὐτεξούσιον という用語は、ネメシオスが、ポセイドニオスから借用し来た用語であると言えるであろうか。それは非常に疑わしいと思われる。筆者はこのことをふしんに思うが故に、筆者の研究の結果を述べて中世哲学の専門家諸兄の御意見をうかがいたいと思うのである。

私が調べたところでは、τὸ αὐτεξούσιον という用語が一番最初に現われているのは、Septuaginta のマカベオ書の第4巻2章21節である。ここでこの言葉は αὐτεξουσιότης という女性形で用いられている。言うまでもなく70のマカベオ書第4巻は、キリスト教の真正の經典として認められていない偽作であるが、それにも拘らず、これは紀元後1世紀に書かれた重要な書物である。この書物の別の標題は περὶ αὐτοκράτορος λογισμοῦ であるので、キリスト教の初期の時代の人々は、その著者は紀元後1世紀のヨセフス<sup>(34)</sup>ではないかと考えた。この偽マカベオ書である第4巻は非常にきれいなギリシャ語で書かれていて、新プラトン学派の学説の影響を受けている。その著者はヨセフスではないであろうが、アレキサンドリア乃至は小アジアのギリシャ語を常用するユダヤ人であったことは確かである。

それ故に αὐτεξουσιότης という用語の源泉は、紀元後1世紀のユダヤ教と新プラトン学派の学説が混合しているマカベオ書であるとすれば、この用語は哲学的な雰囲気においてのみならず、宗教的な雰囲気において創造された新造語であるということになる。従って αὐτεξουσιότης 乃至は αὐτεξούσιον という新造語は、原本批判研究の見地からも、また思想研究の見地からも<sup>(35)</sup>紀元後1世紀の新造語であると思われるのである。

ともかく、極めて明白になったことは、この新造語が紀元1世紀の項から益々ひんぱんに使われだすということである。最初は上述したヨセフスの偽作に現れるが、次にはヨセフス自身の真正な著作である Bellum

<sup>(36)</sup> Judaicum と <sup>(37)</sup> Antiquitates Judaicae に、*τὸ αὐτεξούσιον* としても、また *αὐτεξουσίας* という形でも現れている。

次に 2 世紀に入るとこの新造語は、エピクテートの弟子なる <sup>(38)</sup> Arrianus の <sup>(39)</sup> *Dissertationes* に現われている。3 世紀に入ると、<sup>(39)</sup> Aphrodisias の *Alexandros* の *περὶ εἰμαρμένης* の 14 章に現われる。

更に、この語は、2 世紀から 3 世紀までの、キリスト教の初期時代の教父達によっては、即ち <sup>(40)</sup> エイレナイオスとか、<sup>(41)</sup> ヒッポリトスとか、アレキサンドリアの <sup>(42)</sup> クレメンスとか、<sup>(43)</sup> オリゲネスとか、<sup>(44)</sup> テルトリアヌスとかによって屢々用いられている。

新プラトン学派に属する 3 世紀のプロチノスは、*τὸ αὐτεξούσιον* という用語を特によく使っている。ホルピリオスによって編纂されたプロチノスの <sup>(45)</sup> *Enneades* には、この新造語が何回も現われている。特に第 VII *Enneade* の第 VIII 章の第 1 項から第 8 項までにおいては、この語が *τὸ αὐτεξούσιον* などの言葉によって説明されている。

その後 4 世紀に入ってからキリスト教の教父達、特にギリシャ系の教父達は殆んど全て、人間は神 (*θεός*) の似姿にかたどられて (*κατ' εἰκόνα*) 造られているが故に、自由性、或は自己権力、即ち *τὸ αὐτεξούσιον* という特権を生れながらにして所有している、と教えている。やはりアレキサンドリアの影響を受けたカパドキアの <sup>(46)</sup> バシリオスと <sup>(47)</sup> ニッサのグレゴリオスとの書物のなかには、*τὸ αὐτεξούσιον* という用語は、非常に屢々用いられているが、ここには一つ一つ引用することができないのでそのまましておく。

これまでのところでポセイドニオスからニッサのグレゴリオスに到達し、そこからこの名前をその著作につけられたエメサのネメシオスに戻ってきたが、ここからヨハンネス・ダマスケヌスを通してトマス・アキナスに帰ってくることは、この小論の第一に述べたことをふりかえってみると容易である。

## (三)

## 結 語

(48)

この小論の第三部において Klibansky のすすめに従って、アキナスの思想のうちに、新プラトン派の伝統と共にピザンチンの伝統が、いかなる程度まで影響していたかを論究するつもりであったが、これは後の機会にゆずることとした。

## 註

- (1) ビサの Burgundio による Johannes Damascenus の De Fide Orthodoxa のラテン訳は 1153-1154 年頃のものでされている。これは Petrus Lombardus の Sententiae の雛形となり、中世の神学者達によく用いられた。
- (2) Bologna の Michael Lequien はドミニコ会の修道者であって、1712年に Johannes Damascenus の De Fide Orthodoxa の新たなラテン訳を試みた。Migne P.G., t. 94所収のラテン訳がそれである。
- (3) Saint John Damascene De Fide orthodoxa, versions of Burgundio and Cerbanus edited by Eligius M. Buytaert. O.F.M., S.T.D., published by the Franciscan Institute, St. Bonaventure, N. Y., 1955.
- (4) De Fide Orthodoxa, Lib. II, cap. 12, De Homine; Migne, P.G., t. 94, col. 920.
- (5) Burgundio, loc. cit. edit by Buytaert, 1955, P. 113, § 2.
- (6) Thomas Aquinas, Summa Theologiae, Ia IIae, prologus, Editio Piana, Ottawa, Canada, 1953, vol. II, p. 710 a 7-8.
- (7) Burgundio, I.c. ed. by Buytaert, ut supra, p. 113, l. 24n. 24. Damascenus の原文としては Migne, P.G., t. 94, col. 920 B 10.
- (8) Migne, P.G., t. 94, col. 919 B 12-13.
- (9) Tertullianus (III saec.), De Anima, cap. 21, § 6, cf. Editio Brepols, Series Latina, II, p. 814,36.
- (10) S.P.N. Maximi Confessoris (VII saec.), Opuscula Theologica et Polemica ad Marinum, Migne, P.G., t. 91, col. 9-22, 特に col. 16-17.
- (11) S. Maxim. Conf. ibid. col. 279-286.
- (12) S. Gregorius, Nyssenus Episcopus, (IV-V. saec.) Migne, P.G., t. 44-46.
- (13) Nemesius, Episcopus Emesenus ( V saec.), Migne, P.G., t. 40, De Natura Hominis, col. 503-818.
- (14) S. Greg. Nyss., ibid., t. 45, col. 187-222.
- (15) Cf. Notitia Historica, ex Bibliotheca Patrum Gallandi, t. VII, prol. xi, Praef. Fr. Matthaei., Fabricii, etc. Migne, t. 4., col. 479-502. cf. etiam: The Library of Christian Classics, Vol. IV, Cyril of Jerusalem and Nemesius of Emesa, edited by William Telfer, London, 1955, SCM Press Ltd.

- 16) Nicholas Alfanus は, Monte-Cassino のベネチクト会の修道者。後に Salerno の San Benito の大修道院長となり, 更に Salerno 教区の大司教となった (1058—1085)。この Alfanus の Nemesios "Premnon physicon" は 1917 年 Carolus Burkhard により critical text として Teubner に収められている。
- 17) Gilles Morelle の翻訳としては, Nemesios の De Natura Hominis のうち第二章と第三章に当る部分だけが, 1638 年に Nyssa の Gregorios の "De Anima" として出ている (Migne, P.G., t. 45 所収)。
- 18) Christian Friedrich Matthaei (Wittemberg 大学教授) は 1028 年に Magdeburg から Nemesios の "Natura Hominis" の新たなラテン訳を出した (Migne, P.G., t. 40, col. 503-818)。
- 19) Johannes Burgundio はピサの法学者であり同時にギリシヤ学者で, 1153-1154 年に Damascenus の De Fide Orthodoxa のラテン訳終了後, Frederic Barbarossa 皇帝の援助により 1160 年から Nemesios の De Natura Hominis のラテン訳に着手し二年ほどで完成している。このラテン訳は Petrus Lombardus, Thomas Aquinas の主として用いるところであった。Albertus Magnus はしかし Alfanus のラテン訳を使用している。
- 20) Migne, P. G., t. 40, col. 588A 12—13. t. 45, col. 212 D 4.
- 21) Burkhard, Nemesios Premnon Physicon a Alfano, Teubner, 1917, P. 49, 11. 24—25.
- 22) Migne, P. G., t. 45, col. 211 D 11 12.
- 23) Migne, P. G., t. 40, col. 587 A 15—B 1.
- 24) Migne, P. G., t. 94, col. 920 B 12.
- 25) Summa Theologiae, Ia Ilae, Prol., Editio Piana, Ottawa, Canada, vol. II, 710 a 6-8.
- 26) Stoicorum Veterum Fragmenta, Hans von Arnim, I, 32, 31; 34, 23-34; Apocrypha IV Machab. *πνεῦμα νοερὸν* cf. Ueberweg Geschichte der Philosophie des Altertums (Berlin, 1920) § 74, p. 594.
- 27) Poseidonios については, Ueberweg, Geschichte der Philosophie des Altertums (Berlin, 1920), § 66, pp. 502 ss.; pp. 176 ss.
- 28) Werner Wilhelm Jaeger, Nemesios von Emesa, Quellenforschungen zum Neuplatonismus und seinen Anfängen bei Poseidonios, Berlin, Weidmannsche Buchhandlung, 1914.
- 29) Karl Reinhardt, Poseidonios, Oskar Beck, München, 1921.
- 30) Dr. I. Heinemann, Poseidonios' metaphysische Schriften, Verlag von M. & H. Marcus, Breslau, 1928.
- 31) Max Pohlenz, Tierische und menschliche Intelligenz bei Poseidonios, Hermes, Zeitschrift für klassische Philologie, 76 Band, 1941, Heft I, pp. 1-13.
- 32) Max Pohlenz, Griechische Freiheit, Quelle und Meyer, Heiderberg, 1955  
 仏訳: "La Liberté grecque", traduction de J. Goffinet, Payot, Paris, 1956. 原典が手許になかったためここでは仏訳を用いた。 Cf. p. 176.
- 33) Migne, P.G., t. 45, col. 212 D 4.
- 34) Ueberweg, Geschichte der Philosophie des Altertums. Berlin 1920, § 74, p. 594.
- 35) このような「新造語」の作りかたについては, cf. H.D. Saffrey, "Le 'Peri

philosophias' d' Aristote et la Theorie platonicienne des idees nomrbes", Leiden  
E. J. Brill, 1955, 1 P. 48, note I.

- 36) Flavius Josephus, "Bellum Judaicum", Ed. S.A.Naber, Leipzig, 1888-96.  
37) id. ibid. "Antiquitates Judaicae".  
38) Arrianus, "Epiceteti Dissertationes", ed. H. Schenkl, Leipzig, 1894, lib.IV,  
cap.I, versus 62.  
39) Alexandri Aphrodisiensis Qu. De Fato, ed. Ivo Bruns (Supplememntum  
Aristotelicum II pars ii), Berlin, 1892, p. 182, 24.  
40) Migne,, P.G., t.7, col.1101 C 1-2.  
41) Migne, P.G., t.16, col.3048 D 2-3.  
42) Migne, P.G., t.8, col.797 C 3; t.9, col.618 D I; col.752 B I.  
43) Migne, P.G., t.11, col.249 A 1-13; col.257 C 7.  
44) Migne, P.L., t.2, col.646-752; De Anima, cap. XXI, § 6, Edit. Brepols, 1954,  
p. 814, 36-39.  
45) Plotin, Collect. Univ. de France, Assoc. Budé, Texte établi et traduit par  
Emile Bréhier, Paris, Ed. "Les Belles Lettres", 1954 Ennéades VI, 2e Partie,  
viii, ch. 3-8.  
46) Migne, P.G., t. 30, col.32 C 3; col.204 c 5.  
47) Migne, P.G., tt. 44, 45, 46, Passim.  
48) R. Klibansky, "The Continuity of the Platonic Tradition during the Middle  
Ages" The Warburg Institute , London S.W., 1950, p.19, 24-29, 33-37.